

特116

953

橘旭翁作譜

宇治川上

264
180

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

始





宗家橋
藏書



四 まつ敷萬騎の軍兵を

三 都へこそは差向けたり
一番

六 茲に佐木四郎高綱は

五 出陣の御暇乞とて

四 鎌倉殿にまゐりに

三 殊の外なる御喜悅と
金土

四 きこゆる名馬生月を

四 下し賜ふとありければ
土

三 高綱面目身におま
五番

六 今度此賜の助は頼

五 宇治川の真先渡申べ
四番

四 敵軍はまた敗れずして

四 臣死たりと聞召さば

三 他人先んせられし給
三番

七 若し生存てあるならば

六 先陣は高綱なりと

五 おぼしめし給ひ候へど
金

いと潔く申ししナリ
六番

三 頃は壽永三年睦月中旬
水地

六 かまくら山の朝風は

夏 ^上 なびく鬚くしけつり

中 いさみ嘶く生月の

秋 ^下 影もうつらふ由井が濱

甲 畫くが如き江の島を

秋 ^上 左手に眺めよるもの

中 大磯小磯も時の間に

下 すぎの木立に蔽はる

三 函根權現伏しをかみ

三 はや麓をばなしま江や

七 沼津の右手に名におふ

春 ^上 愛鷹山の山の上

中 くもを貫く富士の嶺は

下 實にやみくたの姿とも

一 打ち仰がる景色なり

三 去程榎原源次景季

四 心うき立つ浮きしまが

原に人馬をやすめつ

六 討手に上るひとぐの

おほ 多くの馬を見てありが

三 己が賜はりたる磨墨た

三 優る馬うまこそなかりけな

三 誇ほこりか見みえつるに二番

七 折をりしも遥はるかの後陣ごじんより

六 競きほへる馬うまを刻いかせつ

五 いそぎでのぼる群ひとむれを

四 誰たれなるむと眺ながむれば

三 四よ目打めうつたる旗はたじりし十三番

四 佐々木殿ささきどのは知しれたれ共ども

三 いと訝いぶかきは彼の馬うまなり金

四 君御きみご秘藏ひぞうのいけ月づきに

四 紛まがひなきこそ不ふ由し議ぎなれ八番

三 吾われ屢しばしば生いけつ月つきを眼こん望まうしたりも

三 遂つひにぬゆるし給たまはらず十五番下

三 さては、この景季かげすえをば

四 佐々木ささきに思おも召めし替かれよ金

六 左さならば是ぜ悲ひなし今いま所ところにて

五 佐々木ささきと引組ひきぐみ刺交さしちがへ

四 君きみに遺恨いこんをばらむと

四 氣色けしきはみてぞ待受まちうけける十二番

上冬 高綱たかづなかともしらまろゆみ

中 霞たなびく絶え間より

下 彼方を見れば如何に

梶原源太腕を張り

三 肩怒らしてひかへたり
十番

三 よろづにせよ高綱は
土

三 かねて景季生月を

三 君に所望たりしよし

四 それを遺恨思ふあり
七番

六 やうこそわれと首肯

五 何氣無状に近寄れば

四 梶原行手は立ち塞り
四番

四 若くは佐采殿は其青を

四 たまはり上り給ふは

三 言葉鋭く問掛れば

三 佐采は態と落着て
八番

三 否と申すも面伏ながら

四 定敵学治の橋を引
つらむ

三 去沖乘り渡さし馬は金

四 生月を申請は存せし

三 御邊の申せ給ひたに

三 御ゆるしたなき物を

三 いかで賜はるべし はす 誓 な 金 土

五 舎人どもをかたらいて

四 誠しやかに申ければ

四 さては左様に候いしが

四 高綱などの申すとも

四 よし後目御勘當あらば あはれ

四 窃に生月を竊み候は

四 梶原儀に顔色和らげ 四番

四 我を先に盗るべきを

上秋 たぐれたりしと打笑ひ

下 語り合ひつ進みけり 川蟬

中 今のときは後遂に

五 知らぬ事こそ是非なけれ 土

中 心も解はともぐに

上春 たぐれたりてふ梶原の

下 たぐれを取らむ識とも

三 知らぬ事こそ是非なけれ

264
180

大正三年三月十八日印刷
大正三年三月廿一日發行

橋
前
築
爲
作
曲
歌
不許複製
所有
著作
權

定價 金貳拾貳錢

著作
發行

所權

橋

一

定

東京市麴町區一番町三十二番地

印刷
者

畑中爲之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

印刷
所

國光印刷株式會社

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行
所

橋前琵琶宗家

東京市麴町區一番町三十二番地

終

